
鬼恋奇譚

碧

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼恋奇譚

【Nコード】

N4121T

【作者名】

碧

【あらすじ】

鬼啼山に響くは狂った鬼の慟哭。

全てを見届けたのは小さな小鬼。

山から鬼の嘆きが消えた頃、小鬼は一人の人間と出会った。

これは鬼の少女と人の少年が紡いだ物語。

序章

鬼啼山おになきやまと呼ばれる山に住むのは鬼やアヤカシ達。
人の踏み入らない魔境。

「いつまでそうやって啼いているつもりだい？」

夕焼けを溶かし込んだような赤い髪と瞳を持つ鬼の子が問う。
だが、鬼は答えない。腕の中のしゃれこうべを抱えたままだただ
啼き続ける。その姿に鬼の子が小さく舌打ちした。

「正気を失っているか」

啼き続ける鬼は力弱く人に追われた鬼。
人の姫に命助けられた鬼。

鬼の腕の中にあるしゃれこうべに鬼の子は溜息をついた。
風が出てくる。

鬼の嘆きを乗せてどこまでも流れていく。
力弱き鬼が人の姫を愛した鬼がそして・・・愛する姫を自ら食い殺
した鬼が啼く。

「鬼と人が結ばれるなんて御伽噺だったんだよ」

互いが異端なのだ。どれだけ想い合っても周囲が許さない。人は鬼
を拒む。鬼も人を容易く受け入れられない。
永く続く排斥が両者の溝を深くしていた。
幼い鬼の子の囁きにだけ人を愛した鬼は答えない。

人を愛し、だけど結果的にその姫を食い殺した鬼。
鬼を愛して鬼を救うためにその身を投げ出した人の姫。

その二人を子鬼は見続けていた。

ただ、見ていることしか出来なかった自分の無力さを噛締めながら
悲劇を招いた二人の恋を見届けた。

見上げるといつの間にか夕暮れは消え星が瞬いていた。

鬼の嘆きは消えない。

だけど、鬼の子はいつかくるその時を感じていた。

鬼のなき声が消える、その時を。

一話

あの啼き声が聞こえなくなつて幾年過ぎただろうか。かつて鬼の子だつた鬼は森の中にひっそりと生える桜の木を一人、見上げていた。

「結局、あんたは啼いたままだつたね」

周りをみずに一人心を彷徨わせたまま逝つてしまつた鬼。

そしてそれを子供だつた自分は全て見届けた。

見届けるしかできなかった。

今更なにを思つても過去は過去にしか過ぎないと分かつてはいてもそれで心は縛り付けられたように過去を悔いる。

薄紅色の欠片が風に吹かれ空へと高く舞い上がった。

それを目で追つて空を見上げた鬼の目に遠く過去になつた光景が思い出された。

まだ、悲劇を知らなかつた頃。

自分の無力を突きつけられる前。

ただ三人で笑えた、幸せだといえた束の間。

空へと伸ばした手を花びらが微かに触れて風に乗った。

「……もどりたい……」

ぼろりと本音が零れたのは桜があまりに綺麗だつたから。

一人でいたから。

だから零れた本音に答える声が聞こえたときは本気で心臓が止まるかと思つた。

「どこにですか？」

振り向くと見知らぬ男が少し離れた場所に立って鬼を見ていた。

「っ！人間！」

どうみても人間。見たところ十代そこら。外見的には鬼と同じぐらいか。地味だが生地のない着物を着ているところを見るといいところの子供なのだろう。

しかし、この山に人間がいること自体が異常だ。

「な、なんで！？」

驚き狼狽する鬼にのん気な笑みを浮かべた人間はひよいひよいとこちらに近寄る。

「こんにちは。鬼のお嬢さん」

異邦の格好をしている鬼を見ても動じた風でもない。一目見て彼女が人間ではないと悟っているであろうにっこりと人好きする笑顔で笑う。

笑うと柔和な顔のせいか余計に幼く見えた。

「お嬢さんはこの山に住んでいらっしゃるんですか？僕、聞きたいことが……」

「帰れ」

人間のセリフを遮るように鬼は腰に下げていた短剣を人間の首筋に押し付けた。

「おや？」

人の目では追いつけない速度で突きつけた刃に男はとぼけた声をもらした。

「この山から去れ」

鋭い警告に人間は少し慌てた。

「こ、困ります！僕、この山の鬼に話しがあつて来たんです！」

「話……？」

ぴくと短剣を持つ手が震えた。

「そう、話を聞きたいんです。鬼啼山の鬼と姫君の話を……僕は姫の血筋のものです」

その言葉に頭を木片で殴られたような衝撃を感じた。
今度こそ完全に喉に突きつけた短剣が誰の目にも分かるくらい大きく震える。鬼の目が驚愕に見開かれる。口の中がからからに乾いて擦れた声しか出てこない。

「な、に……」

脳裏にしゃれこうべを抱き死ぬまで嘆き続けた鬼の姿が浮ぶ。
呆然とする鬼の手をそつと掴むと人間はもう一度その言葉を口にした。

「僕は鬼啼山の鬼に逢いたい。どうか彼の元へと案内してください」

どくんと心の臓がうるさい。

何を言われたのか理解が追いつかない鬼だったがやがて黙って短剣を引いた。軽く俯いた鬼の表情は男からは見えない。

「無理だよ……」

「え？」

何も知らない人間。あの鬼を狂わせた姫の血縁。

鬼は俯いていた顔を上げて生気の感じられない赤い瞳に人間を映した。

何度も何度も思い返した鬼の死に顔を思い出しながら言葉を紡ぐ。

「もう、いない……啼く鬼はもう、啼くことなんてない」

そう、もう啼かない。あの鬼はもう、いない。風が嘆きを伝えることもない。

「結ばれるはずのない恋をして狂って挙げ句死んだ」

人間は静かな瞳のままじつと鬼の言葉に耳を傾けている。動揺も何も感じさせない。ただ、浮んでいた柔らかな笑みは消えて少し思案するように顎に手をやった。

「あなたは……啼く鬼の……血縁の方ですか？」

どうやらこの人間は自分を鬼と姫との子孫だと思っただけらしい。

まあ、あの二人はあんな結末を迎えるまでに何年か交流があったから無茶苦茶な推測ではないけど……それでもおかしい。

的外な言葉に鬼は笑い出さなくなった。
自然と口元が緩む。

「残念。あたしはただの知り合い。やつとはこれっぽっちも血縁関係はないよ。ガキの頃、世話になっただけ。・・・よわっちい奴だったけど鬼とは思えないくらいお人よしだったからね・・・」

だから実の親に殺されかけた半鬼である自分を助けたりした。遠い遠い記憶に束の間意識が過去に向かう。だがすぐに振り払うように頭を振ると鬼は人間への警告を口にした。

「あんたはもう帰った方がいいよ。ここは異郷。人の世界じゃなくあたしら異形の領域。人のいる場所じゃない」

この山は人の領域ではない。
時の権力者から異端とされた者達、鬼のような人外の者達。そんなものたちが棲む山なのだ。

彼女のように比較的に人に友好的なものや無関係を決め込むものが多いが中には人に迫害され恨んでいるものも棲んでいる。早々に立ち去るのが良策だと鬼は忠告した。
手を振り払い背を向けかけた鬼になにを思ったのか人間が声を掛ける。

「待って！貴女の名前は」

なんて変わった人間だろうかと思う。鬼の名を聞きたがるとは。ふっと笑いが零れた。鬼は暮れていく夕焼けを指差した。

「夕だよ」

名を名乗ったのは気紛れ。

まさか名乗るとは思わなかったのか人間が拍子抜けした顔で固まっている。その顔があまりにも可笑しかったから鬼は余計な忠告をしてやる気になった。

「あんたもとつて喰われなくなかったら寄り道せずに帰りな。人の時間が終わる。黄昏時は息を潜めていた私たちアヤカシの動き出す時間だよ」

フワリと風が桜の花びらと共に鬼の赤い髪を舞い上げる。かすかに目を細め鬼は一度だけ後ろを振り返り、まだ固まっている人間に少しだけ笑った。

「気をつけて」

ひらひらと手を振りながら手短な木に飛び移った。

身軽な動きで木々を飛び移りながら鬼は先ほどの出来事に苦笑いを浮かべた。

「変わった人間だったなあ・・・」

微かに揺れて遠ざかる梢をあの人間がいつまで見送っていたことなんて鬼は知る由も無かった。

一話

鬼の父。

人の母。

そしてそのどちらでもない自分。

夕の最古の記憶は自分の首を絞める恐ろしい形相の女の顔だ。

『鬼の子！』

苦しい。苦しいとじたばたと暴れる手は小さく力は弱い。

「人にはない。赤い髪！目！おぞましい！こんな鬼が私の胎から出てきたなんて！」

その顔に浮ぶのは紛れもない嫌悪と恐怖。

「死」も「殺される」という言葉も幼い子には理解できない。心を占めるのはただ目の前の女に対する恐怖。

そして本能的な生への執着。

女が狂ったように叫ぶ。

「死ね！死ね！死んでしまええええつええええええ！」

どくんっ！と心臓が大きく跳ねる。

喉が呼吸をしようと動く。

極限まで追い詰められたことで父親から受けづいた純血の鬼の血が死に間際の自分を生かそうと動き出す。

どくんどくと心臓の鼓動が大きくなっていく。

視界がゆっくりと赤く染まっていく。

『おぞましい子！忌み子！』

とくんと一際大きく心臓の音なる。

それは終焉の合図。

二人の人の終わりと。

一匹の鬼の誕生の産声。

急激に目覚めた鬼の血は幼子だった身と精神を十歳前後に成長させ、そしてそれと同時に顕現した力はその意思とは無関係に己を殺そうとした人の女を容赦なく切り裂いた。

それが、己をこの世に生み出した「母」と呼ばれる存在であることも知らずに。

目を開ける。どうやら昔の夢を見ていたのだと理解した夕は重たい頭を振りながら起き上がるうとして自分が枕にしていたものに気付き少し、眉を潜めた。

恐る恐る上を見上げると見慣れてしまった柔らかい笑顔が自分を見下ろしているのを見つけて夕はむっつりと黙り込む。その笑顔に少しばかりこちらを心配して安心させるような感情が見え隠れしているのに気付いてますます夕は不機嫌になった。

「おはようございます」

柔らかな口調が今は逆に夕の感情を逆撫でする。どうしてこいつに寝顔を見られているんだ。しかも膝枕はないだろうと怒りだか自己嫌悪だか分からない複雑な感情が胸の内に生まれていく。

あの日、初めて逢ったあの日からこの人間は三日を空けずに山に来るようになった。どうも鬼啼の鬼について夕から話を聞きたいらしくしきりに夕を探していた。

最初は夕も無視していたのだが来るたびに人の名前を連呼しているのに苛立ちそれでもまだ我慢していたら今度は人から迫害されて山に逃げ込んだ者たちが作った村のほうに迷い込みそうになった段階で夕も色々諦めた。

村の者の生活のためにも人間にその存在を知られるわけにはいいかない。そのために止む無く姿を現したわけだが正直後悔した。

この人間はどうにもこうにも夕の苦手とする性格の持ち主だった。

言うことやることとにかく夕の感情を逆撫でしてこちらを振り回すくせに本人にはまったくもって自覚も悪気もない。

ぐったりと疲れるのだが放っておくとどこに迷い込むか分からないのでこの人間が飽きるまでは夕は付き合ってやることにしていた。だが、適当に話をしているうちについつい居眠りしてしまったりしい。そして眠っている所をどういう経緯かこの男の膝を枕にする事態に陥った。一生の不覚だ。

がしがしと苦虫を噛んだような顔で頭をかく夕に人間はのほほんといつもの様子だ。

「夕さんお疲れだったんですね。僕の膝でよかったですらいくらでも貸すので寝ていていいですよ？」

ぼんぼんと自分の膝を叩いている人間を夕は軽く睨みつけてから立ち上がった。

「夕さん？」

「帰る」

スタスタと歩き出した夕に人間が慌てて追いかけてくる。

「夕さん夕さん！いつもより帰る時間が早いです！」

「うるさい人間。さっさと山から下りろ！そして二度と来るな！迷惑だ！」

「ひどいなあ・・・僕の名前は桜樹だって教えたのに」

人間・・・桜樹がひどく悲しそうな顔で俯く。だが騙されてはいけないこの人間は夕の言動にへこたれてなどいない。その証拠に夕のあとを歩く速度は全く持って落ちてない上に油断していたら腕を掴まれた。

ふうと夕は足を止めてちらりと桜樹に視線を送った。

「夕さん。僕、まだお話したいです」

ぷいとそっぽを向くと相手も子供のようにむうと口を尖らせた。

「夕さん~~~~？お話、したいし、夕さんにも名前を呼んでもらい
たんですけど~~~~？」

そんなこと夕の知ったことではない。

大体夕とて話せるほどの鬼と姫君の話の全てを詳細に知っているわけではない上にどうしても夕は鬼よりの発言しかできない。

人間達の間ではあの話は姫君が鬼に襲われた話になっているはずだから夕の知っている事実とはかなり違う。

そう説明したらそれでもいいから聞きたいとうるさい。

相手が外見の柔和さとは違い一度言い出したら全く自分の意見を変えない頑固ものだということも短い付き合いで悟ってはいたが軽々しく話せるほど夕の中で消化しきれている過去でもないのどこに誤魔化している。

正直、人に話して落ち着いている自信がない。

「はぁ・・・なにがそんなに面白いのかな・・・結構血なまぐさい話だし、聞いていて気分のいいもんじゃないだろうに」

夕のあきれたように言葉に桜樹は少し困ったような悲しそうな兎に角夕が見たことない複雑そうな表情を一瞬浮かべた。

「僕は・・・知りたい。あの二人がなにを考え、感じそして何故、あの結末を迎えたのか僕は知りたい」

ざぁーと風が森の木々を揺らした。

微かに桜樹の口が何かを紡ぐがそれは風に紛れて流れていった。

「・・・なにか言った？」

聞き返しても返ってくるのは曖昧な笑顔だけだった。

三話

人と鬼。

男と女。

不可思議な交流は両者を結びつけた鬼と姫君との奇妙な一致を見せ始めていた。

「こんにちは。夕さん」

山に登ってきた桜樹の気配に姿を現した夕の姿に彼は柔らかい笑みを浮かべて足を止めた。

「また来たの……。あきないね。人間」

桜の季節に逢って、今はもう紅の葉が空を舞う季節だ。

地面に積もった落ち葉を踏み鳴らしながら夕は物好きな人間と対峙する。

「お話をまだ聞いていませんから」

「……しないって言っているのに？」

「してもらえるまで何度でも通います。それに……………」

「それに？」

意味深に言葉を途切れさせた桜樹は微かに頬を赤らめると夕をみて恥ずかしそうにこう、言った。

「夕さんにも逢いたい、ですから」

「はぁ？」

何を言われたのか分からず聞き返す夕に構わず桜樹は手短な樹の根元に座って夕に隣に座るように誘う。

「どういう意味？」

渋々隣に座った夕は顔を顰めていた。

「何がですか？」

にこにこ笑いながら逆に聞き返されて思わず夕は口ごもってしまった。

なんだろう。居心地が悪い気がする。

そわそわと視線を彷徨わせる夕に桜樹は軽く肩を竦めるとうーんと伸びをした。

「いゝい天気ですねえゝゝゝ」

そしてそのまま夕の膝の上にくろんと頭を乗せてきた。

「なっ！」

「いつだったかした膝枕のお返しを下さい……」

「あれはあんたが勝手に！」

即座に叩き落そうとした夕の手をそんな言葉でとどめると桜樹はゆっくりと目を閉じた。

すぐに寝息を立て始めた桜樹の顔をまじまじと見下ろすしかできない夕は行き場をなくした手をしばらく彷徨わせてからそつと桜樹の髪に触れた。

癖の無い真つ直ぐな髪は男のものにしては綺麗だ。

癖の強い赤毛の自分のものとは大違いの手さわりに夕は「もしも」を思い浮かべてしまう。

もしも自分が鬼の血に目覚めずに人の姿のままだったら・・・こんな黒い髪をしていたのだろうか？

人より優れた身体能力と異能、そして人より遙かに長い寿命と再生能力などない普通の弱い肉体と脆弱な命をもつただの娘。

「ばかみたい・・・」

そんなのは夢物語だ。

現に今の夕は鬼だ。

赤い髪と瞳を持つ鬼。

人ではない。

人であつた自分はあの時、死んだのだ。

生き残るために人であることを止め、鬼の血を選んだのは他の誰でもない夕自身だ。

何を悔いる必要がある？

どんな姿になろうとどんな業を背負おうとも生きることを選んだ。

生きるために捨てたものを惜しんでどうなる。

自分自身でも気付かぬほど微かに夕は顔を顰めた。

夕の人より白い肌をしている指が無意識のうちに膝の上で眠る男の

髪を梳く。

さらさらとこぼれていく髪を飽きもせず何度も手に取る。

「あたしは・・・鬼」

それは言い聞かせるように零れた。

「あんたは人」

ゆつくりとかみ含めるように零れた言葉を風が攫う。

脳裏に浮ぶのは幸せそうな笑顔で寄り添う鬼と人。

そしてしゃれこうべを抱え啼く鬼。

「決して分かり合えない」

理解しあうには両者の本質はあまりのも違うから。

見た目も身体も寿命も全てが違うからわかりあうことなんて無理だ。

「あんたは一体なにを知りたいの？」

桜樹は答えない。

何を求め、何を知りたいのか？

こんな所から自分たちは分かり合えない。

「何を知ろうとしているの？」

ゆつくりと時間が流れる。穏やかな時間。それを人間である桜樹と共有している不思議に夕の心はどこかざわめく。

何かに似ている気がして心の片隅でことりと不安が鳴る。

見上げた空はどこまでも青くて夕は泣きたくなった。

四話

『夕というのはどうかしら？髪と瞳が夕暮れのように綺麗だから』

『それはいいな！よしお前は今から夕だ！』

『少しは悩みなよ・・・別にいいけど』

幸せそうな二人だった。

優しい人たちだった。

誰よりも幸せになって欲しかった。

だけど二人の辿った道は誰よりも残酷な結末。

『泣かないで・・・どうか泣かないで・・・』

彼女は最後までただ鬼を見ていた。愛していた。狂わされた鬼を正気に戻す為に自らの身を食わせるほどに。

『逝くな！俺を置いて逝かないでくれ！』

命は残酷で儚い。

姫の唇が最期の言葉を紡ぐと共に鬼が絶叫する。

『どうか・・・生きて・・・』

誰よりも優しく誰よりも残酷なことを願った人。

残酷な恋物語を子鬼はただ見届けるしか出来なかった。

ひらひらと舞う紅葉に夕はふと作業の手を止めて空を見上げた。

「夕ねえちゃん？」

側で夕と同じように祭りの飾りを作っていた子供が空を見上げている夕を不思議そうに見上げた。

「ああ、ごめん。なんでもないよ」

笑って作業を再開する。

ここは鬼啼山の奥にある隠れ里。人から迫害されたもの達が作った里だ。

彼らは人にはない異能を持つがゆえに時の権力者達から「鬼」にされ弾圧された。

アヤカシの血を引く夕とは違い彼らは人間だ。なのに外見が違う、不思議な能力をもつということ人で人の世にいられずにいた者たちが身を寄せ合い作った隠れ里。

夕の育ての親である鬼が彼らを庇護し、今は夕がそれを引き継いでいる。

今は秋祭りの準備に皆、忙しい。

豊穰を大地に感謝する祭りだ。里のあつちこつちで里人が忙しく動いている。

「夕ねえちゃんへたくそ」

子供素直すぎる一言が夕の胸を深く抉った。

祭りに飾る花をかたどった飾り……。なのだが夕の手にあるのは花というよりかは何か得体の知れない怪物に見えた。今にも地の底

から響く唸り声が聞こえてきそうだ。どうみても祭りには向かない。というか飾りたくない。

「あはははっ！相変わらずタさんの飾りは独創的だ！」

「うちらが子供ころから全然かわらないわねえ〜」

「っーか昔より邪悪さが増してないか？」

「これを見ないと秋祭りがきたって気がしねえ」

変だへたくそだと騒ぐ子供達に見慣れているから好き放題貶す大人達。毎年のことながら夕の額に薄っすらと青筋が浮んだ。

「あんたら・・・毎年毎年老若男女問わず人の手作りを貶して・・・」

ぶるぶると拳を震わせる夕は外見十代実年齢はこの場にいる誰よりも上だが格好のからかいの対象であった。

「いやいや。タさん。こんな飾りを作れるのはタさんだけだよ。自慢していい」

「絶対に馬鹿にしているだろうお前ら！」

顔を真っ赤にして怒鳴る夕に周りがどつと笑う。

「~~~~~っ！帰る！」

ふくれっ面で立ち上がる夕を近くにいた男が「まあまあ」と宥める。

こんな光景も毎年恒例であった。
だからいつものように山にやってきた桜樹と顔をあわせたとき夕は非常に不機嫌であった。

「夕さん？どうしたんですか？機嫌、悪そうですけど」

「気にするな。毎年の事だから」

「？」

訳がわからないと首を傾げる桜樹。まあ、そうだろう。理由も説明せずに不機嫌なのだから。
半ば八つ当たりめいた感情で夕は桜樹を睨んだ。

「な、なんで睨むんですか？」

「八つ当たりだ」

「八つ当たりですかあ！」

不服そうに叫ぶ桜樹に夕の顔がますます不機嫌になる。

「黙って八つ当たりされている」

「無茶です！」

即答されてムカムカが増していく。

「人間。諦めも感じだぞ」

八つ当たる気、満々だ。

「どう考えても理不尽じゃないですか！」

そりゃ、そうだと同意してくれる存在は生憎といま、この場にはいない。

「うるさい！これが理不尽だったあたしが不器用なのも理不尽だ！
そうだ！あたしが悪いんじゃない！あたしは花を作ろうとしたので
あつて謎の生命体をかたどったわけじゃない！」

毎年毎年それこそ一回目の秋祭りから延々と言われ続けた言葉に自覚はなくとも夕はかなり不満を溜め込んでいた。その不満が今、爆発していた。

「不器用なのは生まれつき！仕方ないじゃないか！」

「うあ~~~~夕さん！落ち着いて！揺さぶらないで！」

「うあ~~~~ん」と酒も飲んでないのに絡んでくる夕に桜樹は目を白黒させた。

紅葉舞う中、鬼と人が本人達は真面目なけど側から見るとじゃれあっているようにしか見えない喧嘩を繰り広げた。

五話

住家に行っている古い小さな家で夕は針を手に悪戦苦闘していた。

「くっ・・・この・・・」

何年何十年生きようとこの裁縫の腕はいつこうに上がらない夕だったがさすがに毎年毎年からかわれるのは心外というか見返してやりたいという気持ちがありこうして家で練習しているのだが・・・畳みの上に禍々しい失敗作がいくつも転がっている辺り上手くない。

「むう・・・教えてもらったとおり作っているんだが・・・どうして上手くいかない？」

軽く国一つは呪えそうな失敗作が十を超えた所で夕はようやく針を置いた。

悔しいが認めざるを得ない。

自分に裁縫の才能はない。

生まれて幾星霜。延々と目を逸らし続けた事実をようやく受け入れる準備ができた。

「なんでこんな呪われそうな物ができるかなあ」

ひょいと失敗作を一つ手にとってまじまじと見詰める。

普通の布と糸を使って針で作っているはずなのに妙なテカリはある

し色合いも元の色より随分とドス黒い上に何個作っても必ず目のよ
うなものがある。（花なのに）

こんなものがごろごろと部屋を占拠しているのは非常に精神に悪い
ので夕は押入れに突っ込む。明日辺り燃やすか分解するかして処分
しよう。

そう思つて押入れの襖を閉めようとした夕は奥の方に見覚えのない
箱があるのに気づき首を傾げた。

「なんだ？」

狭い家だが夕の前の家主がやたらと物を溜め込む上に整理整頓の下
手な性質だったので長く住んでいる夕にも見覚えのないものがこう
して時々出てくる。

小さな長方形の箱を手にとるとそのうえに溜まつた埃を払い開ける。

「あつ・・・」

中から出てきた予想外のものに夕は少しだけ息を飲んだ。

「簪・・・？」

決して豪華ではないが落ち着いた趣味のよい簪が納められていた。
桜を模しているらしく薄紅色の飾りが綺麗だ。

そつと手にもつと飾りがしゃらんと涼やかな音を立てた。

「こんなの用意してたんだ・・・」

照れながらこそそと簪を押入れに隠す育ての親の姿が容易に夕に
は思い描けた。

きつと町に出たときに姫に似合いそうだと衝動的に買ったはいいが

肝心の姫に渡す勇気が出ずに押し入れに隠したまま忘れたのだろう。

「分かり易いなあ・・・」

くすりと思わず笑いが零れた。

あの頃の想い出は優しく温かくてそして・・・悲しい。

笑って思い出してもどうしてもあの最期が頭を過ぎるのを止められない。夕は軽く頭を振ってその思考を追い出した。

明日にでも二人の墓に持って行って埋めてあげようと簪を箱に戻しかけてそこで夕は手を止めた。

じっと簪を見詰め、そしてなぜだか周囲をきょろきょろと確認してからそつと筆筒の中にしまつてあつた手鏡と髪紐を取り出すと手早く髪をまとめてそつと簪を髪に挿した。

しばらく鏡を見詰めていた夕だがやがて諦めたように簪を抜くと髻箱に仕舞った。

「・・・似合わないな、やっぱり」

淡い薄紅色の簪は姫の見事な黒髪には合っても夕の鮮やかな赤髪では霞んでしまう。

「簪なんてあたしには似合わないよね」

らしくないと苦笑いを浮かべながら髪紐を解く。

本当にらしくない。簪を見た時、自分も挿して見たいなんてことを思ってしまった。

「あたしが女の子らしくしても似合わないのになあ・・・」

そんな自明の理などわかりきっているのにどうしてだかしてみたく
なった。

夕は女物の格好をすることはない。動きやすさ重視の男のような格
好を好んでしている。言動も思考も女らしさとは掛け離れている自
覚はある。

今までそれが普通だったし別に女らしくしたいなんて思ったことも
なかった。

「簪、か．．．．．」

夕の手の中の簪がりんと涼やかな音を立てた。

六話

「夕さんは女物の着物は着られないんですか？」

いつものようにやってきた桜樹の何気ない一言に夕は口にしていた土産の団子を思わず喉に詰まらせそうになった。

「わあ！水、水！」

慌てて差し出された竹筒から水をあおった。

「いきなり何を言い出す！」

あまりにも見計らったような話題に夕は物凄く動揺した。

「え？そんなに変なことじゃないと思いますけど。夕さんいつも男物の服ばかり着ているみたいですけど夕さんなら振袖とか絶対に似合うと思いますよ？」

「な、何言ってるの？似合うわけが……」

鼻で笑おうとしたが桜樹が意外なほど真面目な顔をしていたので笑い飛ばせなかった。

「似合いますよ」

まるでその姿を見たことがあるかのように桜樹は笑って言った。

「夕さんは綺麗だから。着飾っても綺麗です」

くすくすと笑いながら夕の髪に手を伸ばす。

「この赤い髪に似合うように紅葉をあしらった簪とか・・・」

ふわりと髪を掬いあげられ夕の身体が知らず知らずの内に強張る。

「鮮やかな赤で染めた反物で作った着物なんて絶対に似合うと思いますし・・・」

ばくばくと心臓の音が煩い。

夕はぎゅっと目を瞑って自分でも分からない感情の高まりをやり過ぎそうとした。

「夕さん」

名前を呼ばれて目を開ける。柔らかな笑みが夕を見ていた。

「夕さんは綺麗です」

耳元に口を寄せて囁かれて夕の思考は真っ白になる。

ダメだ。

何がどうダメなのか分かっていないがとにかくダメなことだけがあった。

「か、」

「か？」

「帰る！」

これ以上ここにいたら何を口走るかわからない。夕は敵前逃亡を図った。

「夕さん！？」

桜樹の手が引き止めるように伸ばされる。その手から必死に逃げて夕は全力疾走で逃げた。

「はあはあはあ……」

人間の姿が見えなくなるまで走り続けた夕はようやく足を止めて荒い息を整えていた。

鬼である夕は人より優れた身体能力を持つが今回は動揺が激しすぎて普段ならなんてことない距離を走っただけで息が上がってしまった。

「は、恥ずかしい……」

ずるずると思わずその場に座り込んで顔を隠してしまうぐらいに恥ずかしい。

泣きたい気分だ。

こんな気持ち、生まれて初めて感じた。

恥ずかしいような嬉しいような複雑で説明の付かない感情。

「あたし……どうしちゃったんだよ……」

どうしようもなく夕は膝に顔を埋めた。

そして不意に今の自分と似たような言動を育ての親が取っていたことを思い出した。

「確か・・・あれは・・・姫を前にしたとき・・・?」

姫の一言で一喜一憂するわ、姫の手紙を何十回と読み直して手紙を破って素で落ち込んで部屋から出てこなくなるわ、姫と逢えた〜と小躍りするわ・・・。

「いや、あれは違う。あたしはあそこまで変な言動は取ってない」

育ての親の奇行を思い出したらなんだか自分の言動など些細なことのような気がしてきた夕はどうにか落ち着きを取り戻せた。

「あの人間に悪いことしたな・・・今度逢ったら謝つとかないと・・・」

ぽりぽりと頭をかきながら立ち上がった夕はそんなことを心に留めながらうーんと背伸びをした。

「夕ねえちゃ~~~~ん!!」

「あれ? あんたらどうしたの・・・って! あんたら子供だけで里を抜け出して何やってんだよ!」

保護者なしでいる隠れ里の子供達に夕が怖い顔で叱り付けるが子供達はそんな夕に涙目ですがり付いてきた。良くみるとあっちこっち泥だらけで細かい傷があっちこちにある。

尋常でない子供達の様子に夕は説教を引っ込めて子供の一人の肩を掴んだ。

「ちょ．．．どうした？何があつた．．．．」

大半の子供は動揺のあまり言葉にならなかったが大將格の子供がころうじて夕に理解できる言葉を紡いだ。

「夕、ねえち．．．助けて．．小六が．．．知らない．．．あやかし．．．に．．．」

知らないアヤカシ。

さつと夕の顔色が変わる。

「よそ者が迷い込んでいるの？そして小六が捕まったの？」

子供たちが黙って頷く。

きりと齒を嚙締める。この山に害なすあやかしが入り込んでいるとなると山の主たる夕の出番だ。

厳しい顔をした夕に子供たちの不安げな視線が集まっていたので夕は慌てて表情を和らげた。

「大丈夫。小六はあたしが助けるわ。だからあんたたちは．．．」

里に帰りなさいと言いかけて子供たちだけ帰すのも危険だと気付くだからといって子供たちを里に連れて行ってから小六を助けに言ったのでは手遅れになりかねない。

どうする？

従順は束の間だった。夕はすぐさま決意すると子供たちを連れて駆け出した。

（お願い！まだ、いて！）

先ほどまで自分がいた場所へ。あの人間のもとへと。

「夕さん！どこに行つて・・・つてあのその子供たちは？」

まだその場にいた桜樹が突然舞い戻ってきた夕に目を丸くするのも構わずに子どもたちを問答無用で預ける。

「え、え、え？」

反射的に子供を受け取った桜樹は言葉が追いつかないらしくわたわたとしていた。

「その子たちをよろしく頼む。いい？この人に里の場所を教えて連れて行ってもらって大人に何か言われたあたしがこの人に頼んだと伝えて。それと里に帰ったら皆にアヤカシが入りこんだから警戒を強めるように言つてね」

子供を抱えて成行きを見守ることしか出来ない桜樹を他所に夕は子供たちに伝えることだけ伝えると再び駆け出す。

「夕さん！」

「ごめん！この子たちを頼んだ！他に頼める相手がないの！護つてやつて！」

それだけ言い捨てると後は走ることと気配を探ることに集中する。
この山は夕の棲みか。夕の育ての親が棲み付き、長い年月をかけて
山の気配を把握していき養い子である夕がそれらを引き継いだ。だ
からこの山の気配全てわかる。

ある意味夕はこの山の主も同然なのだ。

覚えのない気配があればすぐに感じられる。意識を集中すると覚え
のない気配と馴染みのある里の者の気配が一緒に動いているのがわ
かった。

夕は一層早く駆け出した。

七話

早く、もっと早く。

急げと命じる心に従い夕の足は人よりも早い速度で駆けていく。

（見えた！）

ぐったりと意識を失った小六を小脇に抱えているそれは一見人間の女に見えた。

だが纏う衣服は無残に切り裂かれ不気味なうめぎ声を上げる口からはよだれが垂れている。青白い肌には肉腫が浮かび上がり窪んだ眼窩には目はなかった。

そして長い髪は蛇のようにうねる。その姿は醜悪で嫌悪を抱かせるものでしかなかった。

その目のない目が行く手を遮るように姿を現した夕に向けられる。

「あ．．．あああああ．．．．．」

「．．．．．死霊が実体を持ったのか．．．」

相手の正体を見極め、同時に相手には説得は効かないと悟った。

死霊が実体を持つことは希だ。そして実体をもち理性を持つ死霊などとはもっと希でたいがいがある一つの執着にとりつかれ彷徨い続ける。目の前の女もその例に漏れないようだ。

「あああああああ．．．．．」

女が緩慢な動きで小脇に抱えた子六を抱えなおすと頭を撫でる。

不気味な姿さえ目を瞑ればそれは母が我が子をあやすような姿だっ

た。

この死霊の執着は「子供」のようだ。

「ぼう・・・や・・・わたし・・・のぼう・・・や・・・」

言葉らしきものを発しながら女はゆつくりと小六の頭を撫でる。女の目にはもう夕の姿は映っていないらしくこちらに視線を向けもしない。

だが、夕が一步足を踏み出すとその音に過剰反応をして小六を庇うように抱え込んだ。

「あ、あ、あああああああああああ」

ぶるぶると震えながらも小六を抱え込んで夕に威嚇するように叫ぶ。夕はじつと女の眼球をなくした目を見詰めた。そして蹲って威嚇しつつける女と同じ視線になるようにしゃがむと優しく女に語り掛けた。

「大丈夫。怖くは無い。ただ、あたしはその子のことが心配でやってきただけだ」

「あ、あああ？」

警戒が少しだけ戸惑いに変わる。空虚な眼窩がはつきりと夕を認識した。その変化に夕は語りかけながら少しだけ近づいていく。焦る心を宥めつつ女の注意を自分にひきつける。

本当はすぐにも小六をこの女からひっぺはがしたい。死霊の近くにいるとそれだけで生者は衰弱していくのだ。小六の安全を考えてもそう長くこの女の側にいさせるわけにはいかない。

「その子が大切なんだ。あなたと同じ」

「お、な・・・じ？」

「そう、同じ。あたしもあなたもその子が大切だろ？」

また少しにじり寄る。警戒させないように少しづつ。

「わた、し・・・おなじ？・・・」

こくりと頷く。

「おなじ・・・おなじ・・・わたしと・・・おなじ・・・」

繰り返す女の腕の中で小六が小さく動いた。

「ぼ・・・うや・・・」

その声は不気味なのに口調は驚くほど優しく慈愛に満ちていた。

「ぼう・・・や・・・わたし・・・の・・・ぼう・・・や・・・」

「う・・・ん・・・？」

女の腕の中で小六が小さく目を開けた。

そして自分を見下ろす女の姿に驚愕に目を見開き次の瞬間にはものすごい悲鳴を上げた。

「うあああつあああつあああああー!!」

「小六！」

滅茶苦茶に暴れ始めた小六に女の腕が緩んだのか小六の小さな身体が地面に転がる。女が再び彼に手を伸ばすよりも夕の姿を見つけた小六が彼女の腕の中に飛び込む方が早かった。

「夕ねえちゃん！！」

慌てて抱きとめ、腕の中で震えている小六の背をあやすように叩いてやる。

「夕ねえちゃん！あれ、あれなに！」

半狂乱で死霊を指差す小六を夕は必死に押さえる。子供とは思えないぐらい力強く掴んでくるので知らず知らずのうちに夕の腕が痛む。確かにこの死霊の見た目からして怖いからこの反応は普通なのだが夕としてはどうにか落ち着かせたい。

「小六！落ち着いて！」

どうにか落ち着かせようとするが小六はすっかり恐慌状態でこちらの言うことなど聞いてはいない。

じたばたと暴れたかと思ったら死霊が動きただけで夕にしがみ付いたりする。

「ひっ！こっち来るなっ！」

のろのろと伸ばされた死霊の腕に怯えたように小六が身を竦めると不意に死霊がどこか途方に暮れたように動きを止めた。

「ぼ．．．う．．．や．．．」

泣きそうな声が夕の耳を掠める。恐怖のあまり夕の肩に顔を埋めて震える小六を死霊が悲しそうに見ていた。

「ぼう．．．や．．．わたし．．．の．．．ぼう．．．や．．．」

そしてその目玉のない目がからぼろぼろと透明な雫が零れ落ちていた。

「ごめ．．．んなさ．．．い．．．あなたを．．．まもれなかった．．．かあさんを．．．ゆる．．．し．．．て．．．」

許してとうわ言のように繰り返す死霊の言葉の断片からある程度の予想がついた夕はそっと自分にしがみ付いている小六を地面に降ろした。

「夕ねえちゃん．．．？」

怯えた瞳を向ける小六に小さく笑いかけてからここで待つように言い聞かせる。

「目を瞑って待つてな。あんまり見ていいものじゃないから」

「ねえちゃん！」

小六が叫ぶのも構わずに夕は蹲りひたすらに許しを請う死霊の前にそつと膝をついた。

「ごめん．．．な．．．さ．．．い。ゆるして．．．ゆるして．．．」

・母さんを・・・・・・・・ゆるして・・・・・・・・」

そっと伸ばした手が死霊に触れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

触れ合った箇所から容赦なく流れ込んでくる死霊の記憶と感情に一瞬意識が飛びそうになる。

音が消え。

色がなくなり。

匂いが消え。

言葉がなくなる。

夕の五感は薄れていき、変わりに自分のものではない感覚が意識を支配していく。

とくとんと命の鼓動が聴こえた。

女は極々平凡な人生を歩んでいた。

貧しいながらも仲のよい家族に恵まれ、年頃になると近所の幼馴染と所帯を持った。

夫となった男は優しくて働き者で女は裕福ではないが満たされた人生を歩んでいた。

とくん。

鼓動が聴こえる。

女は愛しそくに膨らんだ腹部を撫でる。

とくん。とくん。

確かに感じる自分以外の命の鼓動に女は柔らかな笑みを浮かべた。

遠くで赤子の産声を夕は聞いた。

子供の笑い声が聞こえる。

女は繕い物の手を止め、泥だらけになって帰って来た息子にあきれたように目を丸くした。

濡らした手ぬぐいで顔を拭いてやれば嬉しげに笑う息子に女は温かな感情を感じていた。

幸せは突然崩れ去った。

長く続いた日照りに女が住む村は困窮を極めた。

明日食べるものはおるか飲み水すらないという状況で追い詰められた村人たちは人身御供を差し出すことを選んだ。

そして……選ばれたのは女の子だった。

女は半狂乱になって止めた。代わりに自分が死ぬと何度も訴え、だけれどその訴えは聞き届けられることはなく彼女の息子は永遠に手の届かない場所へと送られてしまった。

くるくると狂い始めた齒車。

軋む音が聴こえた。

女は心を病み、そしてやがて死を迎えた。最期の時まで息子に謝り

続けていた。

そしてそれゆえに死霊となりこの世に留まった。

子供を見つけては攫い、しかし死霊の側に生者は長くはいられないために子供は死んでいきその度に子供を捜してまた攫い・・・繰り返し繰り返し同じことを続けていくうちに理性もなにもなくしていき残ったのは罪悪感と子供に対する執着心。

『ごめん・・・ごめんね・・・かあさんを・・・ゆるして・・・』

かくんと衝撃が走り夕の五感が戻る。

荒い息をつきながらも夕の目は真っ直ぐに死霊の女を見据えた。

「あ・・・あ・・・・・・わあああああ・・・・・・」

子を奪われ狂いそれゆえに数多の母に同じ苦しみを与えてしまった哀れな女。

「あんたは、気付かなかったの？」

そつと女の頬に触れる。痛いほどの冷たさ。だけどそこに流れている涙は不思議と温かい気がした。

「あんたの息子はどこにもいないって。あんたが奪った子の母親もあんたと同じ思いを味わったんだってどうして気付けなかったの？」

「ぼう・・・や・・・わたしのぼう・・・や・・・ゆるして・・・ゆるして・・・」

ぼろぼろ零れる涙が夕の手でいくつもはじけていく。

「還りなさい。本来逝くべきはずだった場所へ。あんたの息子がいる場所へ」

夕の言葉に女がのろのろと顔を上げる。

「あ……うあ……」

「もう、解放されなよ。罪悪感からも奪う悲しみからも」

ふわりと風もないのに夕の髪が浮かび上がる。

「願いなさい。ただあんたの願いを想うだけでいい」

風が熱を帯び始め触れ合った箇所から鮮やかな炎があふれ出す。

炎はまたたくまに女を飲み込んでいった。

夕の生み出した炎は女以外燃やすことはない。そして女自身痛みは感じていないようだった。

「次の世では幸せに……」

不意に女が虚空に手を伸ばす。炎に焼かれていく身体が一瞬生前の優しい母の姿になりそして伸ばした手に小さな手が重なった。

「ぼうや……やっと……逢えた……」

ふわりと笑みを浮かべた女を炎が一際強く燃え盛りそして唐突に消えた。

後には何も残っていない。あの死霊がいたという証拠はなにもない。

ただ触れていた夕の手に微かに炭が残るのみであつたがそれも不意に吹いた風に攫われた。

それを目で追いそして微かにつらそうに目を伏せた。

人の母。子を奪われ狂つた母と狂つて子を殺しかけた母。

少しだけ胸に刺さつた棘が痛んだ気がした。

「夕ねえちゃん………?」

気が付くと小六が心配そうな顔でちょいちょいと着物の裾を引っ張っていた。

「………なんでもない。帰ろう」

ぐしゃと乱暴に小六の頭を撫でると夕は立ち上がった。

過去は変えられない。

もういない母親のことはどうしようもない。

「もう、あたしには関係ないんだから」

今の自分は「夕」で「鬼」なのだから。

そう言い聞かせるように呟くと夕は小六の手をとり前へと歩きかけ……。

突き刺すような視線に咄嗟に腰の短剣に手をやった。

振り向いても誰もいない。気配を探っても何も感じ取れない。

気のせいだったのかと思った。だがどうにも短剣から手を離す気になれない。

見えない何かがじつと自分たちを見定めているような居心地の悪さ

が夕の中に巣くっていた。

「ねえちゃん？どうした？」

「え、あ、なんでもない・・・」

小六に腕を引っ張られてようやく夕は肩の力を抜いて短剣から手を離れた。

「帰ろう」

違和感を感じつつも夕はそう言った。

八話

「小六！夕さん！」

里にたどり着くなり血相を変えた里の人間に夕と小六はもみくちやにされた。

「のあ！な、なに！なんなの！」

入れ替わり立ち代り無事を確かめられ夕は困惑小六にいたっては母親が息子が嫌がっているのもお構いなしに抱きしめて離さない。

「夕さん！怪我はないかい！」

「ああ、一人でアヤカシを相手にするなんて心配するじゃない」

ものすごく心配されているのは分かったが仮にも夕はここにいる誰よりも年輩で強いのだが？

その上、育ての親からこの里の守護をまかされているのだから夕が迷い込み里の子を攫ったあやかし・・・実際は死霊だったのだが・・・に対処するのは当然だ。

なのになんなのだ？この過剰なまでの心配は！

ぶすーとふくれっ面になる夕。護るべき相手から子供扱いされているようで非常に気に喰わない。だがそういう顔をすること自体が子供扱いされる要因なっていることに本人は気づいていない。

長く生きているわりに夕は子供っぽくどこか危うい空気を持っているために年上だとわかってはいてもついつい世話を焼きたくなるの

である。

ふくれっ面になりつつも一応の状況説明をしようと口を開こうとした夕に人垣を掻き分けた青年ががしりと抱きついてきた。

「夕さん！」

「うぎゃあああつあああつあ！なに！誰！」

ぎゅうぎゅうに抱きついてくる物体を力の限り引き離す。

いたたたとじたばた暴れる青年には見覚えがあった。

「……………なんでこんな所にあんたがいるのよ！人間」

「酷い！ここに子供を送ってくれて僕に頼んだのは夕さんのくせに！」

がん！と衝撃を受けて落ち込む桜樹に夕は「そいえば」と今更のごとく思い出した。

「ああ……………そういえばそんなことも頼んだね……………」

色々あり過ぎて忘れてたと笑う夕に桜樹はずーんと落ち込んだ。

「酷い……………僕、夕さんに頼られて嬉しかったのに……………忘れてたって……………酷いですよ……………」

いじいじと地面にノの字を書き始めた桜樹に周りにいた里人たちがつぎつぎに慰める。なぜだが桜樹と里人はえらく仲が良さそうに見えた。

「えっと……………一つ聞いてもいい？」

手短にいた里人を捕まえて疑問に思っていたことを口に出す。

「なんであの人間とあんたらあんなに打ち解けているの？」

返ってきた答えは簡潔だった。

「え、だって夕さんの知り合いでしょ？夕さんが里に入れていいって認めた人ならうちらは皆受け入れますよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

人のこと、子供扱いしておいて不意打ちで信頼を見せられた夕は照れた顔を見せたくなくて顔を背けた。

「まあ・・・その・・・事情説明するから皆を集めて、それと・・・」

指示を出しかけていまだいじけている桜樹に視線をやる。

「あんたにも一緒に来てもらうよ。こちらの都合に巻き込んだ形とはいえこの場所を知ったんだ。それなりに対処はさせてもらうから」

きょとんとした目で夕をみた桜樹はついでしゃきんと立ち上がるとなぜだがあつちこつち身なりを気にし始めた。・・・なぜ？

そう思ったのは夕だけではないようで周りにいる人間全員不思議そうな顔で桜樹を見ていた。

「あ、あの！夕さん！僕、えつと変じゃないですか？」

「？変じゃないけど・・・」

いつも通りの格好。どこも変ではない。

「そうですか？あゝこんなことになるなら服を新調しておけばよかった。あ、手土産・・・手土産がない！」

どうしようと悩み始めた桜樹にいよいよ周りの混迷は深まる。

「おい、桜樹さん？どうしたんだい？そんなそわそわして・・・それに手土産って・・・なんで手土産？」

見かねた里人のもつともな疑問に桜樹はぐわっと目を見開いて反論してきた。

「手土産は必要でしょう！」

(・・・・・・なんで?)

桜樹以外の皆の気持ちが今、一つになった。

「それに・・・」

「・・・それに？」

全員の視線を集めた桜樹はもじもじと照れくさそうに俯くとちらりと夕を見る。その動きに集まった視線も夕に移動した。

夕は自分を指差し「あたし？」と首を傾げた。

「夕さんの家にご招待されるのに手土産の一つも持たないのはその・・・男としてどうかと・・・」

「『『『『『はあ？』『』『』『』」

予想外すぎる言葉に絶句する周囲を他所に桜樹は握りこぶしで力説をする。

「だってそうでしょう！夕さんの家にお呼ばれたのに手ぶらで行くなんてそんなことできません！そんな初めから印象が悪くなるような真似できません！ええ、出来ませんとも！」

「いや、待て！ちょっと待て！いつあたしがあんたを家に呼んだ？」

「え？さつき「一緒に来てもらおうか」って・・・」

「ばっ・・・状況を見る、状況を！小六を攫った死霊の話や里に人間のあんたを入れたこととか色々と話するために長老の家を借りるから一緒に来いって意味よ！」

「えっ！じゃあ夕さんのお宅訪問はいつなんですか！」

どこまでボケをかますかこの男は！

「そんなもの未来永劫来ないわよ！」

「！そんな！」

本気で衝撃を受けているこの男の頭の中をかち割って見てみたいと思っただけを決して誰も責めることはできないだろう。

頭に痛みが走り夕は思わず眉間に皺を寄せた。

そんな夕に桜樹はすがりつく。

「夕さん！僕のこと、見捨てるんですか！」

「なにいきなり人聞きの悪いことを叫んでいるのよ！あんたは！第一いつどこであたしがあんたを拾ったか！」

恐ろしいことを衆人觀衆の前で言い出した桜樹に夕の額の青筋がますます増える。

夕はうつると涙の浮ぶ目で見上げてくる桜樹の頭を容赦なく掴んで自分から遠ざけようとしたが敵も離されてなるものと渾身の力を込めてすがり付いてくる。

「は・な・し・な・さ・い！」

「い・や・で・す~~~~~！」

訳のわからない力比べを生暖かい目で見守っていた里人たちが頼放っておくといつまで終わらないと判断したのか今だ言い争う二人を宥めるように割って入る。

「まあまあ夕さん。落ち着いて」

「桜樹さんもな。夕さん突然のことで照れているだけだから」

「照れてなぞいないわよ！」

宥めるようで逆鱗に触れることばかり言っているため夕も宥められるどころかますます激昂する。

事態は混迷を極めかけて……。

「ふおふおふお。とりあえず皆落ち着け」

長老の鶴の一声にとりあえずその場は収まり場所を長老の家へと移した。

九話

夕の話しを聞き終えた里の首脳陣は一樣に黙り込んだ。

「死霊か・・・そういうのが入り込まんように里の周辺には結界が張つてあるはずなのだがなあ・・・」

「子供たちの話から推察すると小六が攫われたのは結界内だったようだし・・・」

里の周辺には人避けと害あるものが入つてこられないように結界が張つてある。なのに今回の事件があつた場所はその結界内で起きたことに皆、首を捻つていた。

「結界は正常なのよね？」

夕が確かめるように長老を見ると長老はちよつと肩を竦めてみせた。

「先代の守護殿が基礎を作り、わしら里人が代々護り続けた結界じや・・・何か綻びがあればすぐさまわかる」

「よね・・・」

遠い目をして結界を作つた当初の話を思い出す。

力は弱くてもやたら知識だけはあつた育ての鬼。

知識は皆無でもその手の力だけはやたらと有り余つていた初代里長。

両者意気投合して鬼指導の下里長が結界を張つたらしいがえらく悪

乗りしたのかやたら頑強で侵入者に見れば性根の悪いアル意味最強の結界を作り出した。

おかげでこの里は護られているのだが強力すぎる結界は年月を経ることに維持の方が難しくなるという弊害も合わせていた。

維持が難しいという理由で何代か前の里長が基本的なものを世襲しつつ維持のしやすい結界を張り直したのを夕は昨日のことのように覚えていた。

張り直したとはいえ時の里長が優秀だったので結界そのものの性能は初代と遜色ないものだ。結界に異常があったとは思えずに考え込んだ夕に里人の一人が気まずそうに手を挙げた。

「あの……ちょいとご報告したいことが……」

部屋中の視線を集めた男は恐縮そう肩をすぼめながらぼそぼそ話し始めた。

「実は、ですね……結界の管理者たちからの報告で今朝方一瞬だけ結界が揺らいだらしいんですわ……」

衝撃の告白に場が騒然となる。

「揺らいだって……一瞬……もしかしてその時に……」

一瞬のことだったのですこまで重要視されていなかった上に小六の事件があつたせいで今まで報告できなかったと男はしきりに頭をかいていた。

「揺らぎか……やっぱり誰か干渉するやつがいるってことか……」

がしがしと頭をかいて悔しそうに唇を噛んだ夕はあの場で一瞬感じた強い視線を思い出していた。

「あん時ちゃんと探れば……」

過ぎたことを言っても仕方がない。今の情報ではこれ以上のことは分かりそうにもなかった。

「あ、夕さん。お茶が無くなっていますよ？お注ぎしましょうか？」

「うん……たのむ……」

「はい！すぐにお持ちしますよ！待っていてくださいね！」

無意識に空になった湯飲みを差し出しかけて……声の主が誰か思い出した夕はものすごい勢いで視線を隣に移した。

そこには湯のみを手にいそいそと部屋を出て行くこととする桜樹の姿に夕は飛び上がった。

「ちょ！あんた何やってんのよ！」

「うあ！」

猫でも捕まえるように襟首を掴み、改めて彼の姿を見て……微妙な顔になったのが自分でもわかった。

「……あんだ、なんで割烹着なんて着ているの……？」

そう頭には三角巾。纏うは白がまぶしい割烹着。妙に似合っているのがまた夕を複雑な気分にした。

「え？似合いませんか？奥様方が貸してくださったんですけど？」
しかも本人結構乗り気だ。嬉しそうに裾などを引つ張っている。
ちらりと入り口の方を見るとたしかに奥様連中がすずなりになって
こちらを見ている。
すきずきと頭痛がする。

「夕さん？」

「お願いだから場の空気を・・・自分の立場を悟って・・・」

「立場？」

はてと首を傾げる桜樹を見ていると本気で今の自分が置かれた状況を把握していなさそうで夕はますます眉間に皺を寄せる破目になった。

「・・・あゝもう！ごめん！こいつの処遇の方を先に決めさせて！」

ずるずると桜樹を中央まで引きずった夕は据わった目でそう宣言した。

「夕さん～～？」

「いいから黙って座ってな！」

場の中央に座らされた桜樹が居心地の悪そうな表情で辺りをきよろきよろと見渡す。

割烹着姿の男を囲んでいる図に入り口から中の様子を窺っていた奥方様たちからくすくすと笑いが零れていた。

「笑われているが？」

「気にしない！」

里人の指摘を無視して夕は話を進めた。

結果。

「なんであんたらはこいつをそんなに信用しているんだ！」

里の存在を知った人間・・・桜樹に対して驚くほど里の人間は肝要だった。

彼の処遇にたいしてはあっけらかんと。

「桜樹さん。この場所のことは他言無用でお願いします」

「はい。わかりました」

で終わらされた。

さうしてこの話題はここで終わりといわんばかりの空気に夕が刃を入れる。

「だああああ！どうしてこう、のん気な会話で終わらせるのよ！ほとんど良く知らない人間を信用しない！」

お母さん宜しく腰に手をやって里人をしかりつけようとする夕に彼らは邪気の無い笑みで言い返す。

「あははは。桜樹さんを里に入れたのは夕さんじゃないですか」

「ぐっ！」

「夕さんが人間と逢っていただなんて俺ら知らなかったし？」

「ぐぐっ……」

それにと長老が好々爺の笑みで言葉を引き継いだ。

「夕さんが信用して、里に入れたお人じゃ。ワシらはそれを信じるよ」

「~~~~~!？」

言われた途端、夕の顔がその赤い髪よりも真っ赤に染まる。

「なっ！なっ！何を言ってるのよ！恥ずかしい！」

あわあわとあからさまに動揺する夕をその場にいる全員が微笑ましそつに見守っていた。

「あ、あたしのことなんてそんな信用したって……その……自分で考えなさいよね！痛い目見るわよ！」

全くだからほっとけないのよ！と怒って夕は視線を明後日の方向へと向けた。

さくりと落ち葉を踏みながら夕と桜樹は山道を歩いていた。

夕があきれたような視線を向ける先にはたくさんの野菜やら秋の味覚やらが入った籠を嬉しそうに抱える桜樹の姿。

帰り際に「土産」だと里中の人間がよつてたかつて持たせたのだ。

「みなさん。とてもいい人ですねえ」

うきつきとそんなことを言う桜樹は里のことがどうやら気に入ったらしい。

「・・・説明したと思うけど・・・あの里にいるのは「人」じゃないわよ」

少なくとも人の世では「人」とは認められない者達だ。

自嘲混じりにそんなことを言ってから夕はすぐに口を閉ざした。

嫌だった。彼らをこんな貶めるようなことを口にした自分が酷く嫌だった。

本当の異端である自分が何を言っているのだろう。

思わず眉間に皺を寄せてしまった夕に桜樹が不思議そうに首を傾げてそれからいつと笑った。

「不思議なことを言いますね。僕は「人」にしか逢っていませんよ？」

顔を上げた夕に桜樹は柔らかく言葉を続ける。

「人ですよ。あの里の皆さんも夕さんも種族や見た目や力の有無とか色々ありますが皆個性ですよ。少なくとも心があって言葉が通じて一緒に笑い合える人を僕は「人」と呼びます」

柔らかいのにその言葉はとても強く夕の心に響いた。
その言葉に夕は何も言えなかった。

ただ、一瞬だけ泣きなくなった。

「……あんだ馬鹿だね」

「え！なんですか！」

不服そうに唇を尖らす桜樹だったがすぐに夕の様子が少し違うことに気付いて不意に顔を覗き込もうとした。
顔を見られたくなくて夕は少し早足で桜樹の前を歩いた。

「そんなことを言う奴は早死にするよ」

かさりと足元でつむじ風が落ち葉を鳴らす。

「もっと利己的に生きな。何でもかんでも受け入れていたらあんたが拒絶される」

人が異端に対してどれだけ排他的になれるのかを夕は身をもって知っていた。

人から見れば長い生の中で幾多の悲劇を体験した。

人でありながら「人でないもの」に理解を示しそれ故に同胞であるはずの「人」から迫害されたものたちもいたことを夕は知っている。
森の入り口にたどり着いた。

夕は桜樹を振り向く。

「帰りな。人の世に。そして……二度と……ここには……」

」

「また来ます」

夕の言葉に被せるように桜樹が力強くそう言い放ったので夕は思わず口をつぐんで桜樹を見る。

桜樹は変わらず柔らかい表情で夕を見ていた。夕の赤い瞳を真っ直ぐ見返しながら言い聞かすように彼はその言葉を繰り返した。

「来ます。逢いに来ます」

何か言おうとした夕の口が開きかけて結局言葉にできなくて閉じた。しばらくそんな夕を待っていた桜樹だったが夕が口を開きそうになるので微かに溜息をついてから再び歩き出した。

「夕さん。僕は」

すれ違うその時、桜樹の言葉が風に乗って夕に届いた。

「他の誰を裏切っても貴女だけは決して裏切らない」

振り向いたらもう随分と遠くなった背中しか見えず夕はしばらくその場に立ち尽くしていた。

十話

桜樹に隠れ里の存在がばれてから数日。驚くほどすんなりと桜樹は隠れ里のこともそこに住む住人のことも受け入れまた里の者からも受け入れられていた。

ふらりと現れた桜樹が夕に「里に行きたい」とせがんで来た時にはどうなることかと思ったが意外と上手くいっているようだ。

今も秋祭りの準備を楽しそうに手伝っている。

そしてそんな彼を夕は監視役として見張っていた。誰に言われたのではなく自主的に、だ。

というか自主的に彼を見張ろうと考えたのが夕しかない時点で大問題だと夕は頭を抱えなくなった。

（まったくこの里の住人は揃いも揃ってのん気者だ・・・）

子供達と一緒にあって飾りつけをしている桜樹を夕はぼんやりと見詰める。

子供を抱き上げて高いところの飾りつけを手伝っている姿は思いつきり里の風景に馴染んで見えた。

（警戒、しすぎなのはわかっているんだけど・・・）

なにも夕とて桜樹が里に害をなすものだと思っっているわけではない。どう考えても天然で人が良さそうで裏表がなさそうな桜樹がこの里を危機に陥れる光景は逆に想像が付かない。

だけど・・・桜樹は「人間」だ。

夕のように「あやかし」でもない。

この里の人間のように「あやかしにされた」者でもない。

人の世に暮らしてそこで柵を持つ桜樹が度々山に・・・それも鬼が棲むと噂される山に入ることに家族は気付いているのか？回りの人間達は？

桜樹自身は無害でも彼を取り巻く人間や環境までが夕たちにとって無害とは限らない。

言いたくはないが限り無く有害であるとは想像するに容易い。

人は人ではないとされたものに対してどこまでも冷淡になれるのだ。夕を殺そうとした母親のように・・・。

喉が圧迫された気がして夕は軽く俯いてその幻想の感覚をやり過ごした。

夕はどうしても人とそうでない者が共いるとよくないことが起きる気がしてたまらなくなる。

それは夕自身が鬼と人との間に生まれ、そして父からは見捨てられ母から殺されかけたことと育ての親である鬼と慕っていた人の娘との悲恋を見たことが大きく関係していた。

鬼でもない。人でもない。中途半端さゆえに両親からは愛されず疎まれ、大切に想っていた者達は悲劇のうちに果てていった。

頭ではそんなことはないと思っけていてもどうしても心の奥底にいるもう一人が叫ぶ。

「人と鬼は共に在れない」と。

こうやってあやかしではない「人」から「人」ではないと迫害されただけの「人」と共にいるのに夕が体験した人と鬼の悲劇が全てで

はないとわかっているのに叫ぶ自分は消えない。

消すことができない。

考えてもどうしようもないと頭を振って意識を変えた夕が顔を上げると物凄い至近距離に桜樹の顔があって息を飲んだ。

「・・・・・・・・・・」

「夕さん？」

近い。ものすごく、近い。

普通に話す距離ではない。

「う・・・・・・・・」

「う？」

夕の言葉を桜樹が不思議そうに繰り返す。彼の吐息を感じて夕の我慢の上限があっけなく訪れた。

「うあああああああああ！」

ぶんつと空を切る音と共に夕の足が真っ直ぐ桜樹の鳩尾に決められた。

「ぐあ！」

動揺のあまり桜樹を物理的に遠ざけた夕と

突然の事で何も構える事が出来ずに蹴りを喰らいその場に蹲る桜樹。

「な、なんで……?」

腹を押さえてある意味当然の疑問を発する桜樹だったが生憎とそれに答えるほどの余裕が夕にはない。

真っ赤な顔で力の限り桜樹から離れようとしていた。

「ゆ、ゆうさ……ん……」

よろよろとそれでも夕に追いつがる桜樹はさながらちよつとした恐怖で夕は先ほどとは別の意味で慌てた。

「ちよ!近寄るな!」

「ひ、ひど……くう……」

のろのろよろよろそれでも夕に近寄るその根性はどこから発揮されるのかわからない。が、夕は容赦なく逃げた。

その後、頭を冷やした夕が懇切丁寧に女性にあんなに近づくなと桜樹に説教していたのだが……桜樹がそれに納得したかどうかは不明である。

十一話

秋祭りに向けて忙しい里の空気に心が躍る中。夕は一人で里の周囲の見回りを強化していた。

例の人為的に引き起こされたらしい死霊の事件の時に感じた強烈な視線。そして一瞬だけ消えたという結果。どうにも気になる。

暗い森の中を夕は一人、歩く。

今の所怪しいところも気配もない。

「誰かが・・・この森に干渉している？」

ぼつりと不安が零れた。

目的がわからない。それどころか姿も見せない干渉者に里のものたちの守護を自認している夕の心はささ波が立つのを押さえられない。

夕には力がある。

純血の鬼ではないがそれでもそれらに匹敵する力は持っている。

だが、夕一人でこの山に暮らすもの全員を護りきることは難しい。まして棲みか込みで護るとなると絶望的だ。

干渉者の目的が森自体なら皆で逃げればいい。だが、里の者達の一掃だとしたら・・・。

ぶるつと恐怖で夕の体が震えた。

かつて夕の育ての親である鬼が狂い、愛した姫を食い殺す破目になったのはこの森に棲む「異端」を一掃しようとした「人」の策略にはまったことが原因だったのだ。結局は姫を失った鬼の暴走により

その場にいた人間全てを惨殺したことで人の干渉は立ち消えた。その後も山によそ者が入るたびに容赦なく惨殺していった鬼に恐れをなして長い間この山の平穏は保たれていた。だけど、鬼の嘆きは消えた。調べれば分かる。啼き鬼がいなくなつたことを。そしてそれを知って人はどう行動する？

早鐘を打つ心臓がうるさい。

嫌な予感がする。

じわじわと逃げ道を塞がれているような圧迫感と不快感。何か、計り知れない思惑が徐々にこの山を追い詰めているような気がした。

十二話

——どうして・・・・・・・・。。。

自分に馬乗りになっている女の顔は長い黒髪が帳となって夕には見えない。

——どうして！

ああ、また夢だ。

夕はどこか遠くでそう思った。
繰り返し繰り返し見る、夢。
過去が夢になった夢。

——どうして・・・・・・・・おまえは・・・・・・・・。

女が夕の首にかけていた手に力を込める。途端に氣道を塞がれいき
苦しくなる。

女の顔は見えない。ただ長い髪と怨嗟のような声だがやけにはつき
りと聞こえてくる。

——どうして・・・・・・・・どうして・・・・・・・・私は・・・・

せ、ないの？

夢が唐突に暗転する。

最後の声だけが不鮮明で何を言ったのかわからない。
ただ、虚ろな瞳で夕は消えていく世界を見ていた。
夢が覚める。

目覚めればこれはただの夢。

だけど、今は、紛れもない夕の現実。

女の指も与えられた息苦しさも全て味わった。

どうしてこの夢を何度も何度も見るのか理由を夕は知っている。
きつと。この夢でしか逢えないから。

あの人が真っ直ぐにただ夕を見たのはあの時だけ、だったから。

『かあさま』

もう呼べない人をただ想った。

十三話

夢は夢。ただの泡沫。それなのに忘れたい過去を孕み、私に突きつけてくる。

闇がある。過去がある。泥のように底が見えないそこから抜け出せない。あかくことも出来ずただ、沈んでいくのを怯えつつ受け入れるしかない。

『……………さん』

光も希望も見つからない。

『ゆ……………さん』

緩やかに心を満たすのは絶望。泥に沈み、息が出来ない。あきらめたはずなのに手が無意識に空を自由を求めるように伸ばされた。

誰も、掴んでなんて、くれないのに。

『夕さん！』

強く夕を呼ぶ声と共に宙をかくばかりだった伸ばした手を掴まれる。泥が、逃がさないようにまとわり付くが引き上げる力は弱まることない。

『夕さん！』

ああ。私を呼んでいるのは……………。己の赤い瞳が開かれた先に

見るものに気付き、夕はほんの少しだけ安堵した。

「夕さん」

繋いだ手が暖かいことを思い出す。
暗く重い泥が遠ざかるのを感じた。

「夕さん！」

「……………五月蠅いわよ。そんな大声出さなくても聞こえてるわよ」

声を聞いた途端、心配そうに覗き込む瞳を見つけた途端涙が出る
ぐらい安堵したことを隠すためにわざと不機嫌な声を出す夕に桜樹
は「すぐくうなされていたので心配しました」と繋いだ手をきゅう
と強く握り締める。

暗い暗い夢の中から引つ張り出してくれたのはこの強さと温かさ
だった。

夕は眠気の残る頭で繋いだ手をそのままにした。
今はもう少しだけ、この温かさを感じていいと思った。

いつものように山に行き、珍しく隠れ里には行かずに初めて会っ
た頃のように森の中で話をしていたら、夕がうつらうつらと舟こ
ぎ始めやがてすうと眠りこんでしまった。

こてんと肩に乗ってきた重みに微かに笑みを浮かべつつ桜樹は夕
の眠りを妨げないように位置を変えてそのまま背後の太木に背を預
けた。

風が森を駆ける。木々の梢が鳴る音、虫の声に動物達の気配。静
かなでも確かな命の気配がここには満ちていた。

桜樹は隣で眠る夕を見つめる。

赤い髪に赤い瞳の鬼の少女。自分が生まれるはるか前から存在し、そして自分が死んだ後もあり続けるであろう鬼。

そう、鬼なのだ、この隣で無防備に眠る少女は。

じつと夕を見つめる桜樹の瞳は何を思っているのか読み取れない。

「夕さん。僕は……………」

何かを口にしようとした桜樹だったがすぐに辛そうに顔を歪ませ噤んだ。

『ごめんなさい。それでもわたくしは……………』

脳裏に浮かんだ寂しげなそれでいて全てを覚悟した声が蘇り桜樹は強く目をつぶった。

そして言葉にできなかった想いを心の内でそつと告げた。

——夕さん。僕は鬼を憎んでいたんですよ。

きつと一生告げることのない想い。桜樹が抱えている事情も痛みも全部、彼女に伝えるつもりはない。

泣かないでほしい。苦しまないで欲しい。

気づかないで欲しい。浅ましい自分を醜い想いを抱えていた自分を。

鬼を殺すために山に入った自分に永遠に気づかないで欲しかった。
あなた

十三話 裏

『お兄様』

軽やかな娘の声が耳に蘇る。生まれた時から傍にいた、たった一つの存在。疑心と欺瞞の溢れたこの場所で心許せる相手がいることがどれほどこの心を助けたのかきつとあの娘は知らない。

鬼に魅入られし鬼憑きの一族。

人から迫害されぬように、人として生きるために鬼憑きの一族は異端の力を望み、そして、手に入れた人でありながら異端に近寄る一族。

人に尽くし、鬼を異端を殺し続けることを自ら選んだ一族はもう、鬼に魅入られた者とは呼ばれない。

彼らは畏怖をこめて呼ばれる。鬼殺しの一族、と。

時に破魔の刀で時に呪法で人に害をなすものたちを屠った。

数多の血に濡れ、穢れに染まり、怨嗟に満ちた人生でも己が決めたもののためなら戦えた。

善悪など関係ない。ただ、少女を守るためだけに屠り続けた。

だけど、それは終わりを告げた。

少女がいなくなった。

鬼に魅いられ、拐かされたのだと一族の者は噂した。

嘘だ。

彼はその現実を認めることが出来なかった。

力が欲しかった。全てを奪い返すほどの力が。

憎かった。自分からたった一つの拠り所を奪っていった鬼が。

憎くて憎くてどうしようもないぐらいただ、鬼が憎かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4121t/>

鬼恋奇譚

2011年7月2日08時44分発行